

密教と或る少女

時は一三二二年、弘法大師の入定から早五〇〇年の時が過ぎようとしていた。京の都から後醍醐天皇が隠岐の島に流布され、北条を打倒し再度の上洛を謀らんとその地で密かに画策していた。

鎌倉幕府の権勢は地に落ち、京や鎌倉は戦乱の渦に巻き込まれ様としていた。そういった不穏な時代にあつて、深山比叡山の麓の地でその少女は生まれた。

名前は、しょうじ 笙子と言った。

父は雅楽が好きだったのと激動の時代に在つて生き抜くようにとそう名付けたのである。

正面の街道を進むと延暦寺までは約一キロ、左手に見える比叡山の向こう側を四キロ程進むとあの花の都京都があつた。

家は宿場宿を営んでいた。この辺りは延暦寺の寺地となつており、熱心な天台宗徒である父は、他の修行僧も驚くような知識を身につけ、地域の宗徒を指導する区長の様な地位を与えられていた。それ故にこの一角の管理も任されていた。

今と違い照明は、蠟燭か照明用油を灯すしか無い時代である。

日が落ちると、幽谷の地は恐ろしいまでの闇と静けさに襲われた。

時折、夜飛ぶキジや山バトの鳴き声が夜の侘しさをさらに増していた。

しかしこの辺りの四季は、当に自然美の理想と言える程美しかった。

彼女は寒さが好きでは無かつたが、うつつすらと雪に覆われた山々や寺の景色が特に気に入っていた。

月の光が無い時の夜の灯りと言えば、遙か延暦寺の方から淡い月の光にも消されてしまう位の粒々の微かな灯が見える位であつた。

しかし、彼女はこの地が好きであつた。

高名な比叡山は京から近く、怨霊の侵入を防ぐ北東（丑寅）の方角に位置し、空海や日蓮の様な高名な僧たちが修行した地でもあつた。

それ故か高貴な出と思われる尼僧や特定の社寺を持たない私度僧、浪人、魂の救いを求める商人等色々な人々がこの宿を利用したので、彼女はその様子を觀たりやよもやま話を聞く事が楽しかつたのである。

特に、一切の雑音を排除した冬の夜の安寧の中でのよもやま話は、言葉に言えないくらい聞く事が楽しいものであつた。

彼女にはある才能が有つた。それは靈が見えるというものだった。

ごく小さい頃に、寺で必勝祈願の請願をかけに行こうとする武士が泊まつた事があつたが、その本人がいる前で、

「お侍さん！傷だらけで鎧を着た落武者が後ろにいます」

と叫び、相手が武士だけに父は肝を冷やした事があった。

要するに彼女には霊界の住人が見えていたのであるが、その頃彼女自身にも父母にも何の事が解らなかつたのである。

この天賦の才の開花には、信心深い父や一切の雑念を排除する幽玄な大自然という環境が後押ししていたのである。

彼女が十歳の頃には、父はこの子の言動が何を意味するのか理解できるように成っていた。父は即身成仏の教えの本質は、人間の心の中にも小宇宙と呼ぶべき宇宙の法が有る事だと学んでいたもので、人間の肉体と精神の二元性の理解が進んでいたのである。

そしてこの頃、鎌倉・大阪と戦乱があり落武者や主君を失った浪人の来訪が多くなっていた。

彼女が十歳から十六歳までの間に起こった戦乱と言えば、まず三千人の比叡山の僧兵が後醍醐帝を守ろうと唐崎浜で北条軍と合戦を行った事だった。

其の当時の出来事は、彼女が物心ついてから一番物騒な出来事だった。

普段は静寂を保つ街道を、目の部分以外を殆ど覆い尽くす白頭巾に半鎧兜姿の僧兵の群れが長刀や日本刀弓等をひっさげて、蟻の大群のように次から次から通って行くのである。

普段見知っていた僧が何人か通り過ぎたが、普段の温和な顔とは打って違って、何か獲物を追う様な殺気立った目をしていた。

彼女は内心唾然としながら見つめていたが、更に驚かされたのは、かなりの数の僧兵の頭上には黒雲の様なもの立ちこめ、よく見ると魔王や金剛力士像の様な姿の人物が下の僧兵たちを鼓舞しているのである。それら驚くべき光景が、延々と一キロ余りも続いたのである。其の時の気持ちは具体的には説明できないが、何か恐ろしく残酷な事が起きるといふ事は察知できた。

その後、大阪・鎌倉も戦乱の渦に巻き込まれていた。

当にいつ焦土と化すか分からないという恐怖の中で人々は暮らしていたのである。

世が乱れてくると宗教も乱れてくるものである。密教の宗派の中にも利那的に現世ご利益を求める宗派が少なからず生じてきていた。

其の頃、父は彼女にこう言った。

「お前の見えているのは、亡くなった人の姿なのだよ・・・でも私も含め我々にはそれが見えないのだ・・・お前の能力は生まれつきのもだからどうする事も出来ない・・・大きくなったらその力を何かに生かせると良いが・・・」

其の時彼女は、解ったような解らないような中途半端な気持ちであった。

多くの霊を観て十三歳になった頃、彼女はある事に気づいた。

それは、身分が高い人に悪霊が付いていたり、名の無い農夫に光り輝く霊がついたり、要するに外見や身分とは関係ないという事であった。

この頃までには彼女は、父が密教の大切な教えの一つとしていた鎮護国家とは、現実の生活に即して人々を救うという社会的実践活動であるといふ事を理解するようになっていた。

段々と自分の心の作用も解り、生来の明るさと容姿の女らしさも増してきて、旅人の話題に上るようにもなってきた。

一三三三年には新田義貞が鎌倉の北条を打ち、それから僅か五年後の一三三八年にはその義貞が足利尊氏に打たれ、その首が京都の陽明門にさらされた。

義貞が鎌倉を攻めた時には六十万余騎の軍勢が有ったのに、福井の敦賀で討たれた時には僅か五十騎で戦って哀れな事であるよとその凋落ぶりが京の街では噂されていた。

彼の首がさらされた翌日に、泊まりに来た菓草売り商人の話は意外な話であった。

「ああああ・新田さまよ！女さえ居なければ今頃天下取りしていたかもしれないのによ
う・・・

あんな所で美女にお会いできるなんて、思わなかったよ」

別の客が訊ねて、

「美女つて、まさかあの噂に名高い勾当内侍（こうとうのな いし）様かよ？」

「そう・・・遠巻きにあの首を眺めていたら、公家風の女が地面に泣き崩れていた・・・その時、横顔をちらっと見ただけだったが、あっけに取られるような美形でね、世間の噂では、俺が聞いただけでも三回、新田様は尊氏を討つ機会を逃したと聞いている・・・あれを見て全て分ったよ・・・」

「全て分った？」

「いくさで辛い思いをするのとあんな天女ねんじろの様なのと年頃に楽しく過すごすのとどっちが好

いか？答えは決まってるじゃないか、一緒に過すごせば過すごすほどあの女相手じゃ男は皆分ふ

抜ぬけになっちゃいます・・・」

奥の方で落武者風の若い侍がうつむき加減でこの話を聞いていた。

彼女はこの話を聞いている途中、この落武者の頭上に色々な光景が現れるのを感じた。

まず新田と北条の合戦の場面が現れ、彼が勇猛に戦う様も見え、その次には広い屋敷の庭で彼が寢室の外の警護をする様子が映し出された。

霊を見ずに光景を見る・・・不思議であった。今まで人の背後霊は見ても光景を頭上に観る事は無かった。

その光景とはこうであった。

寢室の行燈が、時折二人の動きを影絵のように幻想的に映し出した。

寄り添うように静かに話する姿は、やがて立ち上がって奥の方に消えていった。

奥の方で何事かが行われ、半時程してから行燈の灯りも消され、辺りは漆黒の闇となりその光景はそこで終わった。

少しして、小鳥のさえずりや馬のいななきが聞こえ画面が明るくなった。

朝の光景に変わったのだろう。

ふすまがスーと静かに開き、やや年配の武将が辺りを素早く左右に見ながら、早足であるが音もたてずに歩いて行き、左に消えた。

次に少しして極めて恐るふすまが開けられ、華麗な着物の女性が出てきた。其の髪は長くつややかで、顔は彫が深くその美しさは神秘的にさえ見えた。

其の光景が大きくなり、突然そこで終わった。

そう・・・これらの事は、彼女だけが見た彼の頭上に展開された光景なのだ。

この情景は、余程強くこの落武者の印象に残ったのだろう

そうでなければ、彼女がこういったビジョンを見る筈は無かった。

其の日床に就いた笹子は、なかなか寝付けなかった。

（当代随一の美女！・・・彼はそれを見た・・・遠くで懂れていた・・・あの武将はそうすると義貞という事になる、それと別の無念の思いも感じるが・・・）

彼女は事の概略は理解した。あの若武者に多くの事件が有ったろう事は推測出来た。

（それにしても余りに彼に覇気が無かったが・・・如何したものか？明日は事の仔細をどの様に尋ねたらよいものか・・・別の無念とは？）

等々思索しながらようやく眠りに就いたのである。

笹子の家の前には茶屋が併設されていた。

翌朝彼が茶屋でお茶を飲み終え、おもむろに身繕いを始めた。

ここで彼女は一計を案じた。

「お侍さま、内侍様はお綺麗な方でしたか？」

と切り出したのである。

彼はぎよつとした顔で、暫く彼女の顔を眺めていた。

「！？・・・そなた、何故その様な事を？・・・何故私に聞くのだ・・・」

「私には霊が見えるのです・・・昨日はあなた様の心までもが見えたのです・・・あなた様の警護の様子が」

「？・・・何という・・・信じられぬ、こんな事が・・・ならそなた、私がなぜ比叡山に来たのか、その事も解るのか？」

「・・・いえ、内侍さまをお慕いしている事と、後は、それとは違う苦しみをお持ちのことを感じます・・・でも、何故比叡山に来たのかは解りません」

「そうか・・・そこまで解っているのか・・・これはもしかして最澄様か弘法大師様のお導きだったのかも知れぬ、そなたは、密教の何らかの指導をされているのか？名は何と申す？」

「・・・笹子と申します・・・私は霊が見えるのみでそれ以外の取り得は御座いません・・・指導などとんでも御座いません」

彼はそのうちに気を取り直したように何度も彼女の顔をじっと見たので、段々と彼女は居た堪れなくなり、顔を背けてしまった。

「あ、済まぬ。誰かに似ている様で、つい・・・いくさいくさで明け暮れた挙句、新田様が福井に落ち延びた時、私は主君を見捨てて京に逃げてきたのだ・・・六十万余騎で幕府を

滅ぼした時は、私もいよいよ旗本と思いがつたが、主君が凋落し始めると私は直属の兵でありながら逃げだした・・命運を共にして武士なのに・・」

この若武者崩れは、主君と死を共に出来なかった事を悔やんでいる様であった。彼女はその心を察して、こう言った。

「強い方にお味方するのは世の習い・・今は、大日如来様に願をかけ、新田様のあの世での安寧とあなた様のお苦しみの解放を私は願います」

この様に述べると、その若武者は、胸にこみ上げるものがあつたのか、両拳を握りしめ、下を向きながら涙をぐつと堪えた。

やや暫くして、彼はこう言った。

「かたじけない、そなたのお陰で苦しみが少し和らいだ・・私はこれから大日如来様に許しを乞う・・主君の菩提を弔い、そして私の不品行を深く懺悔する・・」

そう言つて彼は彼女に深く頭を下げ、玄關付近で父にも深く頭を下げて、父に二言三言何かを告げると、うつむいたまま延暦寺の方へとぼとぼと歩いていった。

父は暫くその後ろ姿を眺めていたが、やがて入口から内部の土間の方に戻ってきた。

「ねえ父上、彼は何を述べそうろう？」

「菩提を弔つた後に、必ずここに立ち寄つて、笹子殿にお礼を申し上げたく云々という様な事を述べていた」

「私に？・・」

「そう・・だが、お前に何のお礼を述べたいというのか？・・何か彼に言ったのか？」

「・・・・特には・・ただ、内侍様と新田様が側に見えると云いましたが・・」

「？・・何と！京の真ん中に首をさらされた新田様と、あのいわくつきの美女が彼の中に見えるのか？」

「・・・はい、初めて光景が見えました。彼は新田様直属の武士です・・新田様の屋敷の警護の時に、内侍様のお顔をご覧になった様です・・」

「・・新田様の残党かとは思つたが・・噂の内侍のつぼねに会つたとなれば、その残像も消え去らないのであろうな・・」

「父上はご存知なのですな・・・昨晚、内侍様のお顔も場面に出てきました・・・でも比叡山へ参詣した後には、晴れやかなお顔でお寄り下さるでしょう・・」

大方の参拝客は、朝方宿を立つと遅くとも夕方までには戻ってきた。

しかし、この落武者はその日戻つては来なかつた。

どうしたものかと思つたが、新田様は少し不安を覚えたが、新たな修法を身につけようとしているのだろ

と考へ、その日は眠りについた。

翌日の午前に彼は浮かぬ顔をしながら戻ってきた。

彼女が参詣の労を労おうとして一言声をかけようとする、彼はこう切り出した。

「阿字観とか申す修法の教えを拝受いたし、その夜は宿坊に泊まる事になった。」

そこまでは良かったが、さあ眠りにつこうとすると私の横にいた私度僧が立ち上がり、驚くような事を述べ始めたのだ。」

彼が述べ始めた内容は、笹子の父が聞いたなら怒り心頭に達する様な内容だった。その驚くような内容とは、こうであった。

そのある私度僧が私に言うには、

「皆の衆！よく聞いてくれ！この初歩的な阿字観の習得の為に、我ら凡人は一月はかかる・・・空海様や最澄様ですら密教の奥義を極められるのに何十年も要したのだ、いいか、我々凡人が今の修法で得度（悟りを得るという意味）しようとするなら、どれ位時間を要すると思うか？」

こう言うとは彼は、私の方を見た。

「！・・・それは・・・私の様な凡夫は、無限の時間を要するでしょう」

「その通り、そこでわれは、文観（魔教で時の後醍醐天皇を守護したと言われる怪僧）様にお会いし、秘術の一端を拝受したのだ。本日、私は古来の修法を復せんと叡山に来たが、我らには文観様の立川流が相応しいという事が判った。寺を持たぬ宗派であるから、志ある者は、不動明王近くの元武家屋敷に三、十三、二三日の日に来るように」

そして、彼は更に詳しく場所と修法日時を告げると、ようやく座った。

何人かの者が、

「どの様な修法なのか？」と問いただした。

しかし、彼はドクロと端麗な女人一人が必要と言うこと以外、話そうとしなかった。来れば判る来れば判るの一点張りであった。

そしてかれは、最後にこう言った。

「まず三千院の極楽院を観るがよからう・・・それを見て、極楽の素晴らしさを知り、この様な世界が立川流には待っていると確認するのが良からう・・・」

若武者は、伝え聞いた内容を話すとはっと溜息をついて、

「どうしたら良いものか？・・・百聞は一見に如かずと申すので・・・これから三千院の方へ行ってみようと思う」

「そうですね・・・難所が在ります、重重お気を付けて下さいませ・・・」

三千院への道は、今でこそ観光バスが往来する場所であるが、当時は道も狭く、一方は崖もう一方は大原川の本流であり、川へ転落する旅人が少なからずいたのである。

こういった事情があったので、笹子は真から心配であった。

この当時、すでに比叡山には俗化の波が押し寄せ、心ある修行僧のかなりが三千院へ修業の場を変えるという状況もあった。

彼は比叡山道を三里あまり下り、京の街の東北に着いたのが申の刻の始め（午後一時過ぎ）であった。

道中、彼の胸には不安というより奇妙な期待感が頭をもたげていた。

今の京都の銀閣寺の北辺りから三千院までは、八瀬やせを通過して十キロ余りの道のりであった。彼は少し迷ったが

(今行けば、申の刻(午後四時前後)には到着する・極楽堂のみを参詣すれば、戌の刻(午後八時前後)には戻れるはず・昨晚三日月が出ていた・その薄明りでも道を誤る事は無いだろう・・・)

しかし、彼がこのように判断したのは大きな誤りであった。

もし翌朝出発すれば、これから起こる運命に遭遇しなかったろうに・・・。

彼は三千院への山道を急いだ。

千束の崖という難所も難なく越えて、申の刻(午後四時前後)には三千院の寺社群に到達し、三時間足らずで極楽院、来迎院等を参拝し終えた。

これから下山すれば、真夜中になる事は明白であった。

(帰りは月夜か・・・少しの明りがあれば、下山に支障はあるまい・・・)

彼はこのように考えて、寺社群地域を後にした。

この辺りは元々うっそうたる森林地帯であり、平安時代から墨の産地や隠退人の里とし知られていた。道なりのうっそうとした森の中に、ぼつんぼつんと炭焼きの家や隠居者の家が点在するような処であった。

寺社を離れると、辺りの暗さや林間とした状況は尋常でなく、うっそうとした林の中に小道が見え隠れする状況であった。

何かしらの不安が沸き起こってきた。

四五百m程進むと、道が三方向に分かれているのである。

上りの道を来た時には、このような事は全く気付かなかった事である。

ただでさえか弱い三日月の光を黒雲が遮り、その度に辺りは漆黒の闇に包まれた。

(これは、何としたことか・・・どうしたら良いものか?・・・)

・・・真つすぐ来たのであるから真つすぐ真ん中の道を行くべきだろうか・・・)

墨焼小屋の一角にでも身を横たえる所が無いものかという考えが浮かんだ。

立ち往生しながらそう思った時に、全く突然であるが、数年前のある出来事が頭に浮かんだのである。

その事は、まったく突然であり、数年間に一度も思い出した事は無かった。

彼の脳裏に浮かんだその事とは、五年前の事である。

新田軍勢の一員として鎌倉の北条一族を滅ぼさんと画策していた頃、京都の東寺に詣で武運長久を祈った事があった。

参詣を終え戻りかけた時に、寺の敷地内ですれ違った武家の妻らしい一人の女子がいた。敷地外に出てから、一息つこうとし前の茶屋で休んでいたが、何らかの視線を感じふと顔を上げると、東寺での参詣の時にも見かけた武家の妻と思しき女子が側でお茶を飲んでいないか。

私が顔を向けた時、彼女は慌てて顔を伏せてしまった。向かい同士という事もあり、簡潔にこう質問した。

「そなた、遠くへ旅されるのか？」

「・・・いいえ、京の大原のとある隠居所が私の住み家です・・・父母は既になく、鎌倉に共に住む夫から、鎌倉の街が平穏を取り戻すまで私の実家で待つように諭され、実家の京へ参りました・・・」

「!・・・なら、そなたの夫は、北条高時の家来であるのか？」

「?はい・・・夫の必勝祈念と身の安全を東寺でお祈りしてから、実家の大原の里に帰るところです」

これを聞いて、

「・・・そうかそうか・・・夫がご無事であれば良いがな・・・」

と述べるのが精いっぱいだった。

私はたった今、北条一族のせん滅をお祈りした等彼女に言えるはずもなかった。

女は、深々とお辞儀をすると、街の北の方へ歩いていった。

旅装束のその後ろ姿を、消え去るまで私はじっと見詰めていた。

(何と因果なめぐり合わせよ!・・・)

とため息をつくしかなかった。

しばらくの間は、面長で陰りは有るが清楚な顔立ちが心に残っていたが、その後いつの間にか忘れ去っていたのだ。

なぜ突然あの顔を思い浮かべたのか?不思議である。

少し考えると実家が大原と申していた事を思い出した。

(・・・それで大原の女子の事を思い出したのか?・・・それにしても・・・)

彼は、その顔が脳裏に浮かんだまま、真ん中の道を進み始めた。

幾らも進まないうちに、うらびれた屋敷の門構えが木々の間に見えた。

かれは導かれるようにその前まで行き、壊れかけた門の入り口にたたずんで、極めて薄暗い中の様子を見渡したが、人の気配は無いようだった。

(一夜の宿を乞おうとしたが無駄であったか・・・残念、)

彼は道の方に向きを変え、進みかけた。

その時、出し抜けに後ろから細い声があった。

「お武家さま、ほんまにお久しゅう御座います・・・」

彼はぎよつとして後ろを振り返った。

「!?!?・・・そなた?・・・いつの間にそこに?・・・今まで誰もおらぬと」

「左奥の方に居りました・・・暗くてよう見えなかったのでございましょう・・・」

女の顔は異常に青白く生気が無かった。

その顔に微かに笑みを浮かべ、丁寧にお辞儀をしたのである。

彼女の顔を見た時、瞬時にして、五年前に東寺で会ったあの女子であることが判った。

なぜなら、その直前まで彼は彼女の事を思い浮かべていたからである。

「何故かたつた今、そなたの事を思い出していた。そういえば家は大原と聞いておったので、大原のどの辺りか？と思索しながら歩いていたのだ・・・それにしても、この様な出会いがあるものじゃな・・・不思議不思議・・・」

「私も御座います、このところ体が優れず床に伏せておりましたところ、何故かあなた様の事が思い浮かび、もしやと玄関まで出てみましたところ・・・あなた様がおられるではありませんか、私は嬉しいやら驚くやら・・・これも日頃の大日如来様のお導きかと思いません」

こんな夜中に、山道を下るのは危険でございます、ここでお会いできましたのも何かのご縁、むさくるしい所では御座いますが、どうかお泊まり下さい」

このように述べると、家の中に招き入れたのである。

そうであれば、渡りに船、彼に断る理由は何も無かった。

知らぬ人で無いので、彼の心には安ど感が生まれていた。

中に入ると、土間の中は薄暗く閑散とし、使っている気配は感じなかった。

「・・・そなた、一人で住まわれているのか？・・・」

「はい、以前申し上げた通り、父母もなくあれからずっと一人で暮らしております・・・」

この様な幽谷の中で、女一人数年を過ごす事が可能なのか？彼の脳裏にはいささか不安と疑問がもたげたが、奥の間に彼を案内する女の様子がこのほか嬉々としていたので、そういった不安も薄らいでいった。

「？・・・ここはそなたの寝室ではないか・・・この様な所で良いのか・・・」

室内にはなぜか月の淡い光が差し込んでおり、彼女の顔は何かこの世のものとは思えない様子で薄暗い中に浮かんで見えた。

流れ雲が月を遮る時には、室内は極めて暗くなり、女の顔はほとんど見えなくなった。

「ここ以外にお泊まりいたたく場所も御座いません・・・気になさらずに、お過ごしく下さい」
こう言うと彼女は、京の都と鎌倉の様子を聞きたいと盛んにせがむのであった。

五年前の鎌倉炎上の際夫を亡くし、貞操を守りながら夫の菩提を弔っているのだと彼は思い込んでいた。

「そなた、あれから五年もここにおるのか？」

「はい・・・あの時東寺に参詣してからここに戻り、病に伏せたりしましたが、五年間、今か今かと夫の帰りを待っているの御座います」

(?!・・・何と！夫の討ち死にを知らぬのか？巷の噂で北条全滅の事実は誰もが知っている筈・・・この女子はこのような事をなぜ知らぬのか？・・・)

彼は北条全滅の事実を告げようとし、その言葉がど元まで出かかった。

だがしかし、その北条を打ったのは、彼の属した新田軍なのだ。

もしかして、この女子の友人をこの手で切ったかもしれない。

どうみても、彼女が北条軍の全滅の事実を知っている様には見えなかった。

今ここで、その事実を告げたならば、彼女の悲しみ、怒りはどれ程のものになるか。

かれは真実を告げる事は、出来なかった。

知らぬ振りをして、彼女の話を耳を傾けた。

彼女のよもやま話は暫く続いたが、最後の方で意外な事を口にした。

彼女はにじり寄ってきて、

「お願いでございます！北条の情報をお教え下さい、巷のうわさでも構いません・・・もはやあなた様以外に頼るすべが無いので御座います、私はもうこれ以上は・・・これ以上は・・・」
と言うと、うちに秘めた積年の苦しみが爆発したのであろう、下を向いて泣き伏せてしまった。

この様な苦しみを彼女に与えたその責任の一端は自分にもあるのだ、と思うと、到底他人事は思えなかった。

彼女が泣きやまないのを見て、彼は彼女を抱くように肩に手を当て、そして背中に優しく手を当てた。

彼女は、思いが極まったか座ったままもたれこむように彼の胸に顔を埋めて泣きじゃくってしまった・・・。

彼の胸には色々な思いが交錯した。

ただただ言葉もなく、彼女の背中をさすったり軽くたたいたりし、彼女の苦しみを和らげようとした。

暫くして、彼女の涙が止まった時に、意外な言葉を口にした。

「今日のこの日まで、ただただ帰りを待っておりませんが、五年間も戻らぬという事は、他の女子の元に走ったやも知れぬ・・・あるいは、冥土に旅立ったやもしれぬ・・・という思いが浮かぶ事がございます・・・私はもうこれ以上これ以上耐える事は・・・」

と言うと、また泣き始めた。

少しして、彼女は涙を振り払いおもむろに首を上げた。

どこか慈しむようなまなざしに変わり、

「あなた様にお会いした時、主人の弟君にどこか似ていると思ったのです・・・如来様のご加護がいつの日かあると信じて今日まで来ました・・・失礼ながらあなた様も主君を持たない浪人風・・・この様なむさ苦しい所ではありませんが、私の所をねぐらになさいませんか・・・いえ・・・何なら少しの間だけでも構いません、私の元に逗留して頂けませんか？」
私の頭は混乱した。

（私がいるとこれほどまでに心安らぐのなら、そうしたい気もするが・・・だが、敵方と判れば彼女の怒り苦しみは尋常でないものとなるだろう・・・それに、京や鎌倉で新たな主に仕えもうひと旗上げたい思いもある・・・）

彼は言葉を濁した。

「・・・余りに突然のお話・・・それはどの様にしたら良いものか・・・とにかく、参詣の折には必ず顔を押しに来るぞ・・・」

黒雲がすうーと流れ、月明かりが彼女の顔を横から浮かび上がらせた。

内侍様とは異なった顔立ちながら、清楚かつ可憐に浮かび上がる彼女の顔は、幻想的にさえ見えた。

彼女は心を読むように、静かにじーと彼の顔を見つめていた。

「そなた・・・今宵は何と美しいことよ・・・」

落武者はいささか後ろめたさを感じつつも、もはや感情を抑え切れなくなっていた。

更に彼女を引き寄せると、静かにそして互いの全ての苦しみを消し去る様な口付けを交わし、暫くの間彼女を優しく抱擁していた。

彼女を抱擁している時に、彼女は言った。

「夫は帰りませんが・・・この五年間の苦しみを忘れた気がします・・・今夜は、全ての苦しみを忘れて床につく事が出来ます・・・」

こう言つて、先ほどまで悲しみに涙していた顔とは打って変わり、安心しきった表情でやがて彼女は床に横たわった・・・。

「・・・私もだ・・・何か先ほどまでの不安や悩みは何だったのか・・・そうだ、まだ名を聞いていなかった、名は何と申す？」

「詩乃と申します・・・あなた様は？・・・」

「私は上野こうずけ（今の群馬）の出で、義房と申す・・・」

彼はもはや、これ以上の男女の営みに移ろうとは思わなかった。

なぜならば彼女は、病み上がりに見えたし、既に安心し静かに眠り始めているのである。その寝顔を見ながら、彼は安心の深く長いため息をついた。

（この女子・・・五年間に一夜も安らぎの夜は無かったのであろう・・・何と不憫な・・・）
そう感じると、彼も疲れが堰を切ったように襲ってきた。

彼は昨晚ほとんど一睡もしておらず、今日も多くの事が有り過ぎた。

彼も横になった。

（明日は何と述べたら良いものか？・・・彼女を再び悲しみの渦に巻き込む事だけはしたくない・・・）

そこまで思うと、彼の全身には深い疲労感が襲ってきて、前後不覚の眠りに落ちていった。どれ位の時間を寝過したのだろう。

遠くで修験者達の錫上の杖の音が微かに聞こえた。

部屋の中には日の光がさし、かなり明るくなり、元気にさえざる鳥たちの声は、昨晚の闇夜は嘘であるかの様にさえ感じさせた。

（・・・さわやかな朝だ・・・そう、彼女は横に）

そう思つて、寝ながら横を向いた。

（！！？・・・あちらを向いているのか？・・・）

長い黒髪が見えたが、不自然に見えた。人の頭に生えていると言うより、物に巻きついてい

るという感がした。

寝ている彼女の肩に手を掛けて、こちらに向けようとした瞬間、

「！！うわわ！」

彼は退きながら腰を抜かした。

長い黒髪だけは保たれていたが、顔面は干からびてほとんど骸骨に皮が乗っている姿を呈している。

彼が呆然と眺めていた時、一陣の風が吹き込み、長い髪が彼の方向に生き物の様に向かって来た。

彼は捕まるような気がし、今はただ一刻も早くこの場から逃れんと転げるように土間に向い、そこから必死に門の外へと向かった。

ほうほうの体で何とか門の外に出る事が出来た。

そのまま遠くへ走り去りたい気持ちであったが、一安心したところで、逃げ出し始めた足が止まった。

（朝日に照らされたあの家は、どうなっているのだろうか？）

日の光にはつきりと浮かぶあの家の様子を確かめなければならぬと思ひ直した。

門の外からゆっくりと振り返り、家の様子を眺めると、天井の板がかなり剥がれ落ち、壁は四分の一程が無くなっているではないか。

室内に月明りが差し込んでいたのは、あの天井や壁の隙間からであったのだ。

（あの女子は、確かに生きていた・・・あの姿はこの現実そのものであった・・・私は霊と会話していたのだろうか？）

めくれ上がった壁の板が、風に吹かれて細かく揺れていた。

彼は力なく道の方に向きを変えると、よろよろと歩き始めた。

驚きと幾ばくかの恐怖の感情は、じわじわと悲しみ苦しみへと変わっていった。

自分が慰め慰められた出来事は虚構であったこと、死してもなお主人を待ち続ける女の哀れさそして苦しみ、ミイラと化し最早二度と会えないあの清楚な美しさ、そして彼女が怨霊と化して取り付くのではないか？という幾ばくかの恐怖・・・。

彼の心は、安堵感、ささやかな幸福感、期待感、それら一切の良い感情をはぎ取られたような気持ちであった。

どうしようもない虚無感と苦しみは、徐々に強く強く心に襲って来た。

とにかく彼は、よろよろと小道を下って行った。

三千院に修行に行かんとする修験道者二人が、下から上ってきていた。

彼らは、百mほど先に木立の間に見え隠れする一人の若武者を見つけていた。

彼らはかなりの修行者たちであったので、豆粒の様な彼の姿を見ただけで、尋常な事態ではないなと言う事に気づいたのである。

修験者二人は顔を見合わせると、

「怨霊に取り付かれた顔をしておるな、とうとうあのあばら家の女主人が何かしでかしたの

かのう・・・」

「・・・それにしてもよく生きて出られたのう・・・とにかく、話を訊いてみるか・・・」
もう少し近づいた時、若武者も二人に気がついた。
彼は思った。

（ここを通る修験者なら、何か知っているかも知れぬ・・・ただ何と切り出したら良いものか・・・）

やがて互いは近づいて来て、すれ違う距離となった。

彼は何か言おうとしたが、何と言ったらうまく説明できるのか口籠った。

「あ・・・実は先ほど・・・その、」

「うむ、大体解ったぞ！そなた、悪霊に惑わされたのであろう・・・」

「・・・悪霊とは思いませんが・・・昨晚、すっかりと路に迷ってしまいましたどの道を行ったら良いものか？そこに見える上の三叉路で立ち往生してしまいました。ふと見ると武家屋敷が在りそれから・・・」

彼は、事の大まかを彼らに話すと、二人はそうかそうかと頷いて、

「女の霊は見えぬな・・・とにかく、霊に取り付かれなんなのは良かった。

実はな、数年前に鎌倉から父母の実家の大原の里に逃れてきた女がいた。

父母は北条の遠戚でな、それで鎌倉の武家に嫁いだのじゃ・・・戻った時には、父母は既に亡く、一人で家におったのじゃが、それから数カ月して亡くなったと聞く・・・ろうがい（結核の事）じゃったそうな・・・」

「その亡くなった時は、鎌倉の北条が滅んだ前でしようか後でしようか？」

「うむ・・・確か前の筈・・・そうだ、確かに前だ・・・滅亡の後、我らは北条鎮魂と怨霊調伏の儀を行っておるから、間違いなくその前だ・・・」

別の行者が言った。

「北条滅亡の一月か二月前じゃったろう・・・それにしても、けなげで哀れな女子よのう・・・」
かれは思った。

（知らずに亡くなっていたのか・・・知らぬまま、怨霊となっても待ち続けたのか・・・
ずーとずーと・・・）

彼は眼をつぶり、襲ってくる懊悩を振り払うように細かく左右に首を振った。

その様子を見ながら、修験道者の一人が言った。

「これから毎日、あの女子と北条の菩提を弔うが良い・・・今日は別の修法が有るのでできぬが、近いうちにあの家の中で、鎮魂と昇霊の祈りを成さんと思う・・・それによって、彼女は行くべき浄土へと旅立つはずである。そなたも気が晴れるであろう・・・」

この様に言われ、彼は肩の荷がふと軽くなった。

かれは深々と行者達にお辞儀をすると、また力無くとぼとぼと道を下って行った。

二〇〇九年九月

執筆者 宍戸庸一

北海道虻田郡倶知安町字樺山五十八番地二の自宅にて